朝日新聞

にいがた酒ものがたり

4

廃校、酒造り学ぶ場に

佐渡の尾畑酒造、「学校蔵」計画

西に広がる日本海が一望できる小学校は、「日本一夕日がきれいな学校」と呼ばれた。3年前の2010年、136年の歴史を閉じた佐渡市の旧西三川小学校。残された築60年近い木造校舎を、酒蔵に生まれ変わらせるプロジェクトが始まろうとしている。

計画を進めているのは清酒「真野鶴」の蔵元である尾畑酒造（同市真野新町）だ。社長の平島健さん(48)は「ただ酒を造るというだけでなく、酒造りが学べるような『学校蔵』にしたい」と話す。

西三川地区は、世界遺産登録を目指す佐渡金銀山遺跡の一つである砂金山があった場所だ。リンゴやナシなどの果実の産地としても知られるが、過疎化の波は、この地域にも及んでいた。

小・中学校の統廃合を検討する委員会のメンバーに選ばれていた平島さんは05年ごろ、西三川小が廃校になることを知った。「校舎が、このまま朽ちてしまうのが残念でならなかった。何とか再生できる道があれば、と考えていた」

市は11年に廃校した学校の校舎の利用を認める制度を創設した。この制度を活用できれば――「学校蔵」のアイデアが浮かんだ。

これまでに固まった構想では、二つある校舎のうち理科室などがある特別教室棟を酒造所に改造する。

酒蔵としてはやや小さいため、少人数で時間をかけて造る「小仕込み」方式を採用することにした。酒造りを学びたい人にも「学校」として開放する。「単なる体験ではなく、最低1週間をかけて学べるようにしたい。そうすることで酒造りに対する理解が深まる」

学校蔵には、自身の酒造りへの思いが込められている。

東京生まれで、都内の出版社で編集者をしていた時、尾畑酒造4代目の娘で、映画会社に勤めていた留美子さん(47)と出会う。結婚後間もなく、1995年に佐渡へ渡った。酒造りを一から学びながら、夫婦で老舗の蔵を守り続けている。

佐渡は江戸時代から酒どころだった。県酒造組合佐渡支部が記した「続佐渡酒誌」によると、明治初期には200以上の酒蔵があったという。戦前でも30前後あったが、戦後に衰退。現在残るのは五つだけだ。

「佐渡の酒文化のすばらしさを知ってもらうとともに、長期間にわたって滞在してもらうことで、佐渡や地元の産品のファンが一人でも増えるとうれしい」

こうした動きに、地元の住民からは歓迎の声が上がっている。廃校後の校舎の利用をめぐる話し合いが難航し、取り壊しの恐れもあると思われていたためだ。

卒業生の金子剛さん(66)は「地元の人たちは校舎を残してほしいと願っていた。酒蔵なら文化的な雰囲気も保たれるし、地域活性化にもつながるのではないか」と期待する。

順調にいけば5月にも改修工事をスタートし、14年春にもオープンさせたい考えだ。「酒造りの場所であると同時にいろいろな人との交流の場所にしたい。校舎が地域のシンボルとして、もう一度輝くことができれば」。平島さんは大きな夢を描く。

（川崎友水）

廃校となった旧西三川小学校の前で「学校蔵」の構想を語る尾畑酒造の平島健社長＝佐渡市西三川